

「ずっと私の傍にいたのか」

あきらめたような、それでいて優しい言峰の声色に、素直にバゼットは頷いた。

「よく私を見つけたものだ。誰かに聞いたのか」

バゼットはここへ来た少年と、彼から聞いた話の顛末を手短に話した。言峰は納得したようにひとつ瞬きをし、
「それで私を泥から掘り出したというわけだな。難儀な思いをさせた」

「いえ、私は貴方が生きているのが嬉しくて、夢中でした」
言峰がじつとバゼットを見つめてくる。その射抜くような、心の底までをも見透かされる視線も懐かしく、心地よくバゼットには感じられた。

上半身を起こそうと試みてかなわなかったのか言峰が顔をしかめ、バゼットは手近なクッションを首の下へと足してやる。目つきは元に戻っているものの身体が気怠いのか言峰は深々とクッションに背を沈ませた。重々しい顔つきは、みずからの現状を受け入れながらもどこか腑に落ちていないように思えた。無理もない。このような状態など、前の言峰なら瞬時に脱していた。

世話をするバゼットの手つきを甘んじて眺めていた言峰

はバゼットの目を凝視し、

「生き延びたか。おまえも、私も」

言峰の声は低く、さまざまな色と情でバゼットの心を揺らめかせた。ずっと目の前にいてほしいと願ったその瞳は、部屋を満たす初冬の陽のような冷たさと暖かみを内包していた。言峰は喜びや悲しみを他人へ悟らせず、顔にも出さない。異なる感情や多様な理屈のひとつひとつを寄りあわせては縫いあげ、複雑な模様にしてあらわすような男だ。陰鬱な笑みの下に隠された思惑を探し慮るのが、いつしかバゼットの得手となっていた。

バゼットは長い時間をかけて頷いて返した。

言峰が無言のまま視線をずらし、左腕にたどりつく。

バゼットもつられて左の袖を見つめた。本来なら肩口からまっすぐに伸びているはずの袖身頃は途中から平べったく潰れている。心配はいらないと言いかけたバゼットは口をつぐみ、何と言っていいかわからなくなった。かつて左腕があった場所を注視している言峰の沈黙は痛いくらいに重かった。

「そのうち、義手をつけてもらいます」

なるべく感情をまじえずに、事実だけを淡々とバゼット

は告げた。

「私を怨まないのか。一生残る傷だ。罵られてもおかしくない」

言峰の問いにバゼットは首を横に振った。

「怨んでないません。これは、私の望んだことです。貴方の手にかかるのなら、私はいくら傷つけられようが、死のうが構わなかった」

左の肩の、失われた部分に手をやってバゼットは言った。

現実へと戻ってきてからいつも考えていたことを自分の口から伝えられるのは、静かな喜びがあった。自分と言峰だけに通じる喜悦は、昔も今も変わっていない。

「それに、貴方を充たせたのなら、もつと嬉しい」

「しかし私は、自分の欲望のためだけに、おまえを利用し犠牲にした」

悔いる風でもなく、許しを乞うそぶりもなく、淡々とと言峰が言いつのる。感情の削がれた声は、かえって苛烈な想いが押し殺されているように思えた。あえて悪意をぶつけて相手の本心を引きだそうとする言峰の手法も、バゼットには快かった。

「いいのです。私が貴方の望みを叶えられたのだから」

バゼットの言葉を聞いた言峰はふたたび沈黙した。一点を見つめたまま眉を潜めて着地点を探っている言峰の逡巡がバゼットにはありありと見えた。おそらく言峰も、バゼットの腕を斬り落としたときへたちかえり、闇に浸りながら、いままでの長い道のりをさかのぼっているのだろう。

そのひとつひとつが、自分の仮説と合っているのか確かめたい衝動にバゼットは駆られた。みずからの死を予感した言峰が、自身の悦楽のためだけではなく、バゼットに行くすえを案じ、ふたりの未来を考えた上で手にかけたのだとバゼットは信じている。しかし言峰の顔に刻まれた、疲れのような陰影に気づいたバゼットは考えをあらためた。時間はまだある。自分の疑問よりもまず言峰の体調を優先しなければならなかった。

気持ち落ち着かせようと、バゼットは言峰の肩を撫でた。

「意識を取り戻したばかりなのだから、あまり考えこまないで。とにかく今は休んでください」

バゼットは言峰の暗い闇を払拭するためにわざと明るく言い、やみくもな決意をよみがえらせた。

自分しか識らないまま最期を迎えられる。

だから充ち足りていたのだ。血に染まった外套を滑り落ちていく手、しだいに遠ざかっていく表情、暗闇の底へと沈んでいくバゼットの姿を眺めながら、自分は歓喜に噎び、微笑んでいられたのだ。しかしバゼットの姿が引きはがされていくごとに、胸の裡を引き裂くような痛みは大きくなり、心を激しくかき鳴らした。

言峰は地へ倒れこんだバゼットを見つめた。暗い部屋のなか、窓から投げかけられた微光が床へ長々と伸びている。バゼットの肌は張りつめた静けさとわずかな夜光を取りこみ、澄明な艶を帯びている。

言峰は床へ膝をつき、バゼットの頬に手を添えて、虚空を向いた目を覗きこんだ。瞳に映りこむ自分の姿と情を見極めようとしたが、バゼットの開きかけた瞳孔は濃い靄がかかったように何も映さない。

消えていく。

バゼットの意識が自分の手から離れ、遠ざかっていく。

言峰はバゼットの頬についた涙の跡をなぞり、あたかな生の痕跡を確かめた。肌は血の汚れや闇の穢れを拒み、どこまでも白い。動かなくなったバゼットの姿は穏やかで、

うつすらと光を灯したその顔は微笑んでいるようにすら見えた。

バゼットは最期まで言峰を認め、赦しつづけたまま去っていった。

夜の闇が重々しく背にのしかかってくる。血の海に手を浸し、悦楽と悲痛に震えながら、言峰はそつとバゼットにくちづけた。静謐を身に宿したバゼットは気高く、畏れを抱くほど美しかった。

引き裂かれる痛みは執拗に残っている。しかし今はまだ、この胸の痛みを名をつけてはいけない。つけるとするならばアンリマユを見届け、自分が悪に生まれついた理由を知った時だ。だからこそ、なんとしてもアンリマユを誕生させなければならない。

そうでなければバゼットの犠牲も献身も無価値になる。歪んだ訳を、この心の根源を知ることができれば、あとはこの命がどうなろうと構わない。

髪を梳いてやるとバゼットの血が揺らぎ、心に暗い波紋を広げる。今になって夜風に騒ぐ森の音が聞こえてきた。もし、理由など初めからなかったのだとしたら——言峰は微かに首を振ってその不安を追い払った。